

「ここ数年、小論文指導を行う高校が増えている。大学入試で小論文を課すケースが増えたことが一因であるが、入試のためだけではない、生徒の総合的な学力の向上を目的として小論文指導を行う高校も近年増えてきている。

茨城県立藤代高校の吉津博雄先生は、4月に初めて1年生の担任が集まったとき、LHRを使った1年生からの小論文指導の実施を提案したという。入試対策として3年生から小論文指導を行う高校は多く存在するが、1年生から小論文に取り組み意図はどこにあったのだろうか。

「今年度の1学年主任に決まったときから、この学年では、1年生のときから小論文指導をやっていきなさいと考えていました。以前、持ち上がりで3年間学年主任をやったとき、小論文の校外模試を1、2年生でも実施したものの学年全体できめ細かな指導ができませんでした。また、自分の考えを伝えられる小論文が書けるようになるには、3年生から始めるのでは時間が足りないと感じたからです」

### 総合的な学力向上をねらう

藤代高校の1年生における小論文指導は、入サポートの『小論文アプローチ』でした。『小論文アプローチ』は、さまざまなテーマについて考えながら知識を蓄えるためのワークノートと、文章を論理的に書く力を養うトレーニングノート、そしてどのくらい力がついたかを把握するためのテストの三つからなる。藤代高校では予定として1か月に1回のLHRでワークノートを使い、長期休暇の課題としてトレーニングノートを活用することにした。

「ワークノートではいろいろな問題を取り上げていますが、環境問題のときはまずペットボトルについて考えるなど、身近なところから考えられる構成が、今回の小論文指導に合っています」

LHRでは書くことでなく考えることがメイン。ワークノートと、1学年の小論文担当の岩澤昌人先生を中心に作成したプリントを基に進められる。プリントには、生徒の議論の余地となる質問が載っている。LHRの進め方は、グループ分けをして議論させるクラスもある。教師主導を進めていくクラスもある。

「あまり細かく進め方を決めてしまうとやりにくいでしょう。先生個人のよさや特徴も消えてしまいます。細かい進め方は担任の先生方にお任せしています。最初のLHRのときは先生方もかなり緊張したようですが、今はずいぶん慣れ

試験対策とは位置づけられていない。生徒たちが身につけるべき、論理的に考える力、文章を書く力を養うのが目的だ。

「生徒に『毎日、新聞を読んでいる者はいるか?』と聞いてもほとんど手が挙がらない。本

## 1年生からの小論文指導で論理的に考える力、書く力を育成

を読む生徒も減ってきている。これではいけないと危機感を持っていました。小論文に取り組みようになると、例えば、知識を増やすためにスクラップブックを作る。そうすれば、必然的に新聞を読む機会が増えることになりました。また、小論文を書くときは必ず、『なぜ』と考えるなくてはなりません。そういうふうにして、いろいろなことに興味を持って、知識を吸収し、自

てきたんじゃないでしょうか」

### 書くことへの抵抗感を軽減

生徒の側にも少し変化が見られたようだ。「藤代の地区内では『青少年の主張発表』という中学生と高校生の意見発表会が行われるんですが、そこに出席する生徒の原稿を見せてもらったんです。その生徒が以前、課題で書いた小論文に比べると、『自分はこう思う』というのがはつきり出ていて、ずっとよいものになっ

分の意見を膨らませるきっかけになればと思ったのです。小論文指導を始めるにあたって、どこの高校でも一番の関門となるのは添削指導である。

「ほかの先生方が心配されたのは添削をどうするか、ということでした。それまで小論文指導に携わったことのない先生も多かったのですが、だいじょうぶなのかと思われたようです。だから私は、わからないならこれから生徒と一緒によいところを添削だつてますよといつて、ほめて大きなまるをつけるところからいこう、気楽に始めようと呼びかけたんです。すべてにおいて初めてづくしの1年生からの小論文指導は、『生徒といっしょに学ぶ』を合い言葉にしたスタートだったのだ。

### 身近な素材から考える

「指導を始めるにあたって、教材や取り上げるテーマなどについて考え始めました。最初はすべて自分たちでやるつもりでした。しかし、徐々にこれをすべて自分たちで準備するのはかなり大変だといふ雰囲気になっていったんです。そんなとき目に留まったのが『キャリア

小論文指導の1環というよりは、書くこと、自分の言葉で意見を述べることへの抵抗感をなくすためにを行っています」

今年度は書くことが苦でなくなれば、それで成功だと考えている、と吉津先生。一歩一歩着実に進んでいこうとしているようだ。

### 来年度は添削指導を強化

「気楽にやっていた」と呼びかけて始めたからこそ、ここまですべてやられてきたと思うんです。ですから、これもあれもと欲ばらずにやっていきなさい。軌道に乗ってはきましたが、100%うまくいっているというわけではありません」

まだまだ試行錯誤の段階だと、吉津先生は考えている。「来年度は、もう少し添削指導もやっていきなさいですね。小論文指導に詳しい講師を招いての勉強会も考えています。1年生で始めた小論文指導を、2年生、3年生と進めるにしたがって、レベルアップさせたい。生徒にはより考えを膨らませ、小論文という表現手段を使って自分の意見が述べられるようになってほしい。そして、入試対策としての小論文指導へ深化させたいですね」

「気楽にやっていた」と始まった藤代高校1学年の小論文指導は、今後、添削指導も含め、さらに深化していくに違いない。



茨城県立藤代高校 吉津博雄

昭和25年熊本県生まれ。保健体育担当。同校に赴任して5年目。今年度は1学年主任を務める。来年度は小論文ガイダンスや大学・学部・学科ガイダンス、職場見学、大学見学の実施を考えている。

いました。もちろん240人全員に成果が見られたというわけではありませんが、小論文に対する抵抗感はいぶかなくなったと思います」

今の生徒は、自主性に欠けるとよくいわれる。機会がなければ文章を書くこともあまりないようだ。そこで、今年度の1年生にはあらゆる機会において、書かせる指導を行っているという。「卒業生を迎えるの合格体験談、文系・理系それぞれの大学教授を迎えるの進路ガイダンスなどのあとには、必ず感想を書かせています。